

手拔かりはあっても手抜きがないように

大卒の初任で中学校に赴任し、3年生の国語を担当することになった。3年生は11学級あったので、三人の先生で担当した。自分以外は超ベテランであり、そのお二人から「中間テストは、〇〇ページまでね。」と言われ、とにかくテスト範囲まで進むのが精一杯であったことを覚えている。

ある日、女子生徒のK子が国語の学習に全く取り組まないことがあった。新米の自分はそれに我慢ができず厳しく注意すると、K子は反発し、ついには睨み合いとなった。そのうちに授業終了のチャイムが鳴った。K子は教室を出て行きながら、大きな声で「A先生のほうが授業うまかったわ！」と言いつつ放った。自分は真に心臓に矢を打ち込まれた心境で、言葉を返すことすらできなかった。

A先生は、昨年度までK子の国語を担当し、今は別の中学校に勤務されている。K子のことも気になったが、それ以上に「A先生はどんな授業をなさっていたのだろう。」と、気になって仕方がなかった。

次の赴任校（中学校）で勤務していた時、A先生が教務主任として着任された。自分はチャンスとばかりA先生の授業を何度も参観させてもらった。

自分とA先生との違いは、教室に入ってすぐに納得できた。「空気の温かさ」（授業の雰囲気）が違った。生徒を全身で受け入れて授業される姿に、毎回感動を覚えて職員室に戻ってきた。

そんなA先生の言われた一言が今も心に残っている。「手拔かりはあっても、手抜きがないようにね。」

手拔かりはあってはならないが、もしあっても、周りの先生が助けてくれる。だが、手抜きは、自分の心の問題で、誰も助けてはくれないという意味だと思った。

A先生の生徒に対する構えが、少し分かったような気がした。